

# 東亞經濟論叢

第 一 卷 第 一 號

昭 和 十 六 年 二 月

年 四 回 (三 月 五 月 十 月 一 月) 發 行

## 創 刊 號

宋金貿易に於ける茶錢及び絹について……………	文學博士 加藤 繁
中國金融の特殊性……………	經濟學博士 小島昌太郎
支那農村の包稅制度に就いて……………	經濟學博士 八木芳之助
現代支那社會論……………	文學士 小竹 文夫
支那に於ける米の流通機構と其の流通費用……………	經濟學士 天野元之助
墨家の經濟思想……………	經濟學士 穂積 文雄
領用制の進展……………	經濟學士 德 永清行
東亞食糧問題と食糧慣習……………	經濟學士 大上 末廣
買辦制度……………	經濟學士 鈴木 総一郎
支那に於ける教會の社會性……………	經濟學士 澤崎 堅造
支那紡績業に於ける勞働請負制度……………	經濟學士 岡部 利良
中國に於ける聯合準備制度について……………	經濟學士 熊本 吉郎
佛領印度支那の財政……………	經濟學士 島本 融
東亞廣域經濟の貿易政策……………	經濟學博士 谷口 吉彦

(茶 轉 載)

書 肆 有 斐 閣 發 賣

# 支那に於ける教會の社會性

澤 崎 堅 造

## 一 は し が き

支那に於ける教會並に基督教の勢力が相當大きなものであると云ふこと、また根深いものであると云ふことは、近來屢々注目されてゐるところである。それが實際に宗教的に、また政治的に如何なる意義を有するかと云ふことは、こゝには問はないとしても、一般社會上に、社會の構成や文化の上に如何なる影響を與へ、また關聯を持つてゐるかと云ふこと、殊にそれが經濟の部面に於て如何にあるかと云ふこと、それは從來多くの人は餘り注目しなかつたやうであるが、こゝには特にその點を重視してその大様を窺つて見ようと思ふ。

支那の基督教を見るためには、殊にその社會性を見るためには、まづその歴史を顧みなければならない。基督教が支那に初めて齎らされてから今日まで、大きく分ければ五つの時期になると思ふ。

その第一期とも云ふべきは、西紀七世紀から九世紀まで(唐代)である。この間に所謂景教が初めて將來され、次いで隆盛となつた時代である。勿論支那の邊疆には既に二世紀から三世紀の初めにシリア僧が來たと云ふこ

と、四世紀には支那人にして改宗したものがあると云はれても居る。<sup>1)</sup>併しまづ七世紀頃からと云ふのが確實であらう。十七世紀に發見された大泰景教流行中國碑によれば、唐の貞觀九年(西紀六三五年)に、大泰國(波斯か)から大德阿羅本が長安に來たので、時の宰相が出で、これを迎へ、また寺院にして勅建せられるものが多くあつたこと等が證されてゐる。<sup>2)</sup>天寶元年(七四二年)に長安府及び附近二十二縣の人口約二百萬人の中、二萬人が外國人であり、朝廷の賓客として待遇されたもの四千人、その他官給を受けない蕃胡・雜胡・混血兒は城の内外に四、五萬人はゐたと云はれてゐた。また景教信徒の總數は、回教・拜火教をも併せて十四、五萬と推測された。尤もこれを佛敎の僧侶二十六萬、信徒千三、四百萬と比すれば殆んど物の數でもない。<sup>3)</sup>

第二期は、十三世紀及十四世紀(元代)である。初めて舊教(カトリック)僧侶が蒙古の首都喀喇和林<sup>カラコルム</sup>に來たのは一二四六年の John da Plano di Carpine であり、元の新都汗八里<sup>カンプ</sup>(北京)へは一二九四年に John da Montecorvino が來た。後者の一二三〇五年の手紙によると、元の皇帝の愛顧を受け、首都には既に教會堂も建ち、受洗者は六千人を數へ、或る王は景教から舊教に改宗したとさへ傳へてゐる。<sup>4)</sup>

第三期は、十六世紀及十七世紀(明代)である。この間に舊教が再び隆盛となつた。北京と羅馬との關係は從來途絶え勝ちとなり、従つて舊教もあるか無しかの状態になつてゐたが、十六世紀となり Francis Xavier を初め數多の有能な僧侶が沿岸地帯に來る様になつた。そして國內に這入ることが出來たのは Michael Ruggieri と Matteo Ricci とが一五八三年に廣東の西の肇慶府に定住したのを以て初めとする。Ricci は一五九八年に北京に至り、各地に宣敎所を建て、一六〇〇年には信徒四百人を數へた。一六〇一年には皇帝(神宗)に謁し、同四年

1) The China Year Book, 1935, p. 314.

2) 佐伯好郎博士,「景教の研究」,五三〇頁以下。

3) 同上。

4) H. Yule, Cathay and the Way thither, vol III, London, 1914, pp. 46.

には皇帝の縁者で洗禮を受けるものが出た。 Ricci は聖書の翻譯、基督教文書並に神學書は勿論、心理學・地理學・數學・天文學に至るまで數多の著書を出し、また實際に土木事業にまで功績を擧げたと誌されてゐる。その後、歐洲殊に佛蘭西との關係が密接になつた。従つて十八世紀啓蒙時代の佛蘭西思想との關聯が少くないことゝなつた。

第四期は、新教(プロテスタント)が初めて齎らされた十九世紀(清代)であつて、同時に舊教も亦盛んになつたときである。一八〇七年に英人 Robert Morrison が廣東に着いたのを以て初めとする。一八五八年の天津條約の結果、内地傳道が許されるようになったので、その後陸續として各國よりまた各派より宣教師が派遣された。教會の外にも學校・病院・社會施設等が多く設けられた。教派の數は一九〇〇年に於て六十一を數へた。舊教の方も羅馬公教會並に希臘正教會共に活潑となつた。併し十九世紀の末葉頃から迫害の氣配が現はれた。

第五期、即ち第二十世紀に入るや、その劈頭に拳匪事件が勃發した。このとき滿洲及び北支に於て逆殺されたもの多く、舊教徒三萬餘、新教徒二萬餘と云はれてゐる。併しその後却つて宣教師の數も信徒の數も増加する計りであり、十九世紀末の十一年間の増加割合四割に比して、二十世紀初頭の十一年間は十割であつた。<sup>5)</sup> 以て知るべしである。かゝる状態は歐洲大戰が初まる一九一四年まで續くが、これをもし第二十世紀の第一期とすれば、その後、滿洲事變の勃發一九三一年までを第二期とし、それ以後今日までを第三期とすれば次第にその勢は平調となつたと云ふことが出來よう。その間一九二七年の南京政府南北統一による諸政の改革は、教會の方にも大きな影響を與へた。それは要するに支那の自主性の確立と云ふことであつた。教職についても、教會財政について

5) 後藤末雄博士、「支那文化と支那學の起源」, 三〇五頁以下。小林市太郎氏, 「支那思想とフランス」, 一〇四頁以下。

6) K. S. Latourette, A History of Christian Missions in China, N. Y.

も、教育・醫療の機關にしても總べて支那人に於て指導と責任とを採ることゝなつたのである。

## 二 社 會 性

以上によつて支那の基督教が如何に古くから如何に根深くその社會に浸潤したものであるか、即ちその歴史性について概観したのである。そこで次に社會性について最近の狀況を示すこととする。それを事業別にして、

(一) 教會 支那に於ける教會の狀勢について極めて外觀的なことに過ぎないが、まづ

(イ) 教會數——について、これを世界、殊に東洋諸國に於けると比較して見るならば、次の如くなる。

	總 數		舊 教		新 教	
	大	小	大	小	大	小
世 界	六四、八〇三	一一三、三〇九	九、四〇八	四五、七二四	五五、三九五	六七、五九五
亞 細 亞	三五、六六八	四七、二五〇	六、五〇七	二二、三二〇	二九、一六一	二四、九三〇
日 本	五、二四六	三、四六〇	一四〇	五三四	五、一〇六	二、九二六
滿 洲	二一八	六一八	五一	二五五	一六七	三六三
支 那	七、三三一	一六、八四八	一、五三一	九、九二二	五、八〇〇	六、九二六

(註) 本表は一九三八年「基督教世界宣敎調査」<sup>1)</sup>による。「大」とは比較的大なる教會堂、「小」とは宣敎所・講義所等を指す。

これによると、全世界の教會堂數は一七八、一一二、支那のは二四、一七九であるから、全體の一割四分に當

1929, pp. 508.

1) International Missionary Council; Interpretative Statistical Survey of the World Mission of the Christian Church, N. Y. 1938.

る。その中、舊教は一、四五三、新教は一二、七二六であるから、教會堂の數に於ては、大した差はない。次に  
 (口) 宣教師及び信徒數——については

世 界	總 數			舊 教			新 教		
	外國人 宣教師	本國人 宣教師	信 徒	外國人 宣教師	本國人 宣教師	信 徒	外國人 宣教師	本國人 宣教師	信 徒
亞 細 亞	三、三三三	七、三八五	三、三三三、五五五	三、二二六	二、六九七	二、六九三、六四四	二、七、五七七	九、〇五五	六、〇四四、七六六
日 本	二、四七二	八、〇〇九	五、六、〇〇九	一、二九九	八、四一	三、三三、六三三	一、三三三	七、一四七	三、七、四四四
滿 洲	五、四一	一、〇三三	二、九、九三二	二、三三	二、六七	八、六六一	二、七三	七、六	三、二、三〇一
支 那	九、八五二	二、六五四	三、〇、七、八五二	四、二九九	四、八四三	三、五、四、七、五四	五、四七七	二、六三三	五、六、〇、八、九

(註) 本表は前表と同じく一九三八年「基督教世界宣教師調査」による。「外國人宣教師」中には舊教の司教・司祭・修道士及び修道女を含み、新教では妻をも含む。「信徒」については舊教に於て教友を、新教に於ては陪餐者を示す。従つて何れも確實なるものを示す。

宣教師並に信徒の數を地域別に分つて見ると、(次表は前表とは別の調査なり)

總 數	總 數			舊 教			新 教		
	外國人	中國人	信 徒	外國人	中國人	信 徒	外國人	中國人	信 徒
蒙 疆	二、六四	三、三三	七、五四一	一、二二	二、五六一	六、六六六	九	六	八、五
河 北	一、〇九九	三、〇五	八、八、二〇九	五、七七	一、五五	七、五、八、三三	五、三	七、五	三、三、二、八三

支那に於ける教會の社會性

雲南	貴州	廣西	廣東	福建	浙江	江西	湖北	湖南	四川	河南	安徽	江蘇	甘肅	陝西	山西	山東
三三三	一六八	三三三	一、四〇三	四七〇	三三四	二六〇	四〇八	六〇〇	六六一	五七〇	三三三	一、五五〇	二六二	三二一	三三三	一、二六二
二四八	二二〇	一八七	一、八二〇	一、六六六	一、二八五	五二〇	六三五	九六六	九七四	九八〇	三六八	一、七九三	一〇七	四八三	四六〇	一、五五五
二九、五四〇	四七、三五五	三三、〇九三	二〇七、四〇三	二七、六〇九	二二、六七五	三〇、六六六	八、〇三三	一九、三七〇	一九、六九九	二六、〇三三	一三、一四一	三二、八九一	二八、五五六	九、三〇八	三九、五〇〇	三六、〇七三
六四	八七	六四	六三	二〇七	二六	一七	一七	五七	三三	三三	二六	六六	一六	二四	一五	六二
九四	八九	三三	四九	五	三〇八	一九〇	六	四六	四八四	三六六	二九	六七	四	二四	一七	四七
二、七四〇	三〇、六九	一八、八一	一四、一四一	八九、三五	一四、七三三	二二、八四九	七、〇三四	一八、四九五	一八〇、六五	一五、九四	一七、〇七五	二八、一〇八	二七、三〇	八三、三七	三三、一八〇	二六、二五三
三元	七	五	七〇	二六〇	一八	一〇	三七	二五	四九	三六	三	九四	五	七	五〇	五〇
一五四	三三	一七四	一、五三	一、五七	九七	三三〇	四九	五八	四九〇	六四	二四〇	一、一四一	一	二六	二七	一、〇九
七、八二六	九、四四六	四、七三	六、二六三	六、五九四	七、七〇三	七、八七	一一、〇八	一四、七三	三、九四	三、四八	五、〇〇	二九、七六	一、三三六	七、〇八	八、五四〇	四、八三

(註) 本表は舊教・新教何れも一九四〇年刊報告によるも、新教の中國人宣教師及信徒數は一九二〇年調による。新教外國人宣教師中には妻を含む。また一時不在者をも含む。なほ「蒙疆」は察哈爾及び綏遠であり、「甘肅」の中には寧夏をも含む。

外國人宣教師の國籍を詳細に知ることとは出来ないが、その所屬する宣教團については、舊教に於て(一九三四  
年調)、總數一二三三の中、佛蘭西二六、伊太利二四、支那二一、獨逸一四、西班牙一一、米國九、白耳義七、加

- 2) Annuaire des Missions catholiques de Chine, 1940, Shanghai, pp. 19.
- 3) Directory of Protestant Missions in China, 1940, Shanghai, pp. 10.
- 4) The Christian Occupation of China. 譯「中華歸主」第五編九頁以下。
- 5) The China Year Book, 1935, p. 318 f.

奈太四、和蘭二、愛蘭二、波蘭一、葡萄牙一、瑞西一となつてゐる。また新教に於て(一九三八年調)、總數一六八の中、米國六四、支那二二、和蘭及北歐一九、英國一八、獨逸系一五、濠州・朝鮮各一、その他協同が二六、國際二となつてゐる。尤もこれらの中には、關係事業に所屬するものをも含めてゐる。

信徒について、それを職業別に分つて見るに、一九三七年の Main 博士の支那に於ける新教二十四宣教團に關する調査<sup>7)</sup>によると、農業にたずさはる者が最も多いことを明かにしてゐる。商・工業に屬するものがその次である。併し大體に於て中流階級以上の比較的長期滞在者が多いことを示してゐる。また同年に Pico 教授が各地方代表新教七十三農村教會について調べた結果によると、職業別の百分比に於て「自作農」が三二・八%を示してゐる。「半自作」が一四・二%でその次に多く、それから學生(五・五)、教師(四・二)、小作農(三・六)の順になつて居り、他は殆んど比較にならない。これを以て見れば、農村教會の信徒は七一%を農夫が占め、而も比較的安定せる自作農が多いことを示してゐる。この點 Main 博士の調査と符合する。これを舊教について見たならば一層その割合は増大するであらう。

以上は教會についてのみ述べたのであるが、次に關係事業について概観して見よう。

(一) 學校 舊教に於ては(一九四〇年)<sup>8)</sup>、學校の總數一二、八二六、生徒の總數四二二、五〇〇人である。その中、初等學校の生徒は三九三、二一〇人、中等及專門學校では一七、二四五人、師範學校二九〇人、神學校及實業學校九八九人となつてゐる。また新教については(一九三八年)<sup>10)</sup>、幼稚園一一三校、生徒五、八一五人、初等學校二、七九五、生徒一七三、二二八人、中等學校二五五、生徒四三、八七九人、聖書・神學校一六一、學生四、九八八

6) Interpretative Statistical Survey.  
7) International Missionary Council, Basis of the Church, 1939, p. 304.  
8) op. cit. p. 308.

Madras Series V, The Economic

9) Annuaire, p. 51.



人、師範學校三六、生徒二、六一七人、醫學校六、學生五五七人、專門大學は十四、その學生五、八五八人である。従て舊教では初等教育に、新教では高等教育に力を入れてゐることがわかる。

一九三五年の調査によると、基督教主義の初等學校の生徒は六割が男子、四割が女子であり、家庭については四割から五割が商業に屬すると。官公吏・教員の家庭のものは一割も及ばない。そして家庭が基督教に屬するものは全體の二割から二割五分である。中等學校の生徒にして基督者なるは平均四割位である。基督教主義の大學専門學校にして法令によるものは、一九三五年に於て十九校を數へることが出来る。なほ、九大學（學生五、一九七人）、四文科専門學校（八九四人）、三醫學校（一八五人）、七神學校（一九九人）の學生六、四七五人を出身地別にすると、江蘇（二六一九）、廣東（七四二）、河北（五二九）、浙江（四九〇）、福建（四六五）、四川（四二四）、山東（二二一）、湖北（二〇九）、安徽（二〇八）等の順となつて居り、他はずつと少くなつてゐる。かゝる學生の中、基督信者は四割となつてゐる。

(三) 醫療 病院並に慈善事業については、舊教に於て（一九四〇年）<sup>12)</sup>

孤兒院	三六六	收容	二六、四七六人
		嬰孩	八四、〇七二人
養老院	二七一	老人	七、七二二人
		病人	九二、八三四人
施療所	八三八	患者	一〇、五七八、二七一人（延數）

の數字を示してゐる。なほ一九三三年の調査によれば、病院一〇一、醫師九六人、看護婦四一八人である。

10) Interpretative.

11) China Year Book, pp. 323.

12) Annuaire.

13) Interpretative.

新教に於ては(一九三八年)<sup>14)</sup>、病院三〇〇、醫師外國人二八七人・中國人六三四人、看護婦外國人二七六人・中國人一、六五六人である。なほ

孤兒院	二六	收容	一、〇七二人
養老院	二	〃	三七人
施療所	五九四	患者	一、五六一、九〇八人(延數)

これによつて見ると、新教では比較的大きな病院はあるが、孤兒院・養老院等は比較的少いことがわかる。

(四) その他 文化的・社會的事業として、まづ(イ)文學——について、古くから聖書・神學・文學・科學に關する書物の翻譯が行はれ、また支那古典の紹介も屢々行はれたことによつて、東西の思想交換に益すること多かつたことはよく人に知られてゐる通りである。また(ロ)社會風教——について、纏足・煙片・賭博の禁止、労働・衛生施設の改善、婦人の地位の向上等を調査し指導しつゝある。これは更に廣範に見れば都市或ひは農村の一般的な生活への指導と云ふことになる。保安・訴訟への干渉さへ行ふ状態であり、所謂農村更生運動についても基督教宣教會は大學と良き聯携の下に着々實行しつゝあつたのである。従つて天災・事變或は饑饉・洪水・早魃等に際しても救濟の手段を執ることは云ふまでもない。かくて教會又は基督教事業團が宛ら社會生活の或る種を中心をなしてゐる場合が少くないのである。かゝる基督教農村の規約の一端を例示すれば、<sup>15)</sup>

「凡そ城内(村内)に居住せんとする者は、主任司祭の保證あるもの、若くは主任司祭の保證ある住民により保證されたる者に限る」

14) op. cit.

15) 滿鐵、鐵道總局、「滿洲に於ける天主教」參照。

「凡そ城内に居住する者は十家族を聯合し、之を一單位となす。毎年春秋二季には戸口を調査し、これを公會に申告するものとす。」

「平日に於ても外來の旅客あるときは、その親兄弟を問はず、その都度その旨を公會に申告して登録することを要す。」

「凡そ城内並にその附近に居住する信者は男女を論ぜず毎日曜日及び四大規日には均しく業を休み、聖堂に集り祈禱をなし、説教を聽聞すべし。」

「匪襲の際は聖堂の鐘を鳴らして合圖すべし。鐘樓の上には常に打鐘者一名を置くものとす。この打鐘者は手に望遠鏡を持ち絶えず七キロ以内の四方を監視して匪賊の行動を注意すべし。」

更に(ハ)經濟——に關して教會が調査し指導しつゝあることは云ふまでもない。先きに示した農村更生運動の一翼として合作社運動が起され、殊に信用組合・倉庫組合の結成に大きな力を盡した China International Relief Commission など忘れることは出来ない。工業についても、商業についても少からざる關係を持つてゐることは、次にやゝ詳細に示す所であるが、まづその最も顯著なるものとしても上海除家滙に於ける舊教施設を見て明らかと思ふ。天主堂・修道院・諸學校の外に、天文臺・圖書館・博文館を初め、孤兒院内の印刷・繪畫・彫刻・木工・金工殊に有名なステンドグラスの製造所まである。或は除家滙一體の土地・建物と同信の者に貸與されてゐると聞く。宛然たる一教國が上海の一劃に在ると云ふことだけでも明かではないか。

要するに、支那に於ける基督教の社會に及ぼす影響と云ふものは、今日に於てもなほ相當に大なるものであると云ふことが出来る。勿論その程度は目に見えて明かにすることは出来ないし、また極く最近に於ては支那に於ける自主權の主張から、次第に弱められつゝあることは事實であるが、なほ教會並に基督教事業を無視すること

16) 徐滙紀略、參照。

17) 事業並に施設の各箇別については、外務省文化事業部、「滿洲及支那に於ける歐米人の文化事業」參照。

は到底出來ない。また舊教と新教とを比較して見ると、大體に於て舊教は農村を中心とし、新教は都市を中心とする。舊教は比較的低い階級の者を、新教は比較的高い階級の者を對象としてゐる。舊教は家族的に、新教は個人的に接觸してゐると云ふことが出來ようか。舊教は生活または經濟の部面を極めて重視するに對し、新教は幾分觀念的に文學・風教等を重視する。社會施設にしても、舊教は稍々消極的なる慈善事業をなすに對して、新教の方は稍々積極的なる改善事業をなすと云ふことが出來ようか。

### 三 經 濟 性

支那に於ける教會或は基督教事業の經濟性とも云ふべきものを特に見ようとするためには、大體收入と支出の兩面に分つて考へて見ようと思ふ。

教會並に基督教事業の財源は、一には所有財産、二には献金、三には外國補助である。その中、第一の所有財産については、正確にこれを知る方法が目下のところないのでよくわからないが、たゞ湖北省だけについて調査したものである（一九一五年<sup>1)</sup>）ので、参考のために一應掲げて見ると、

	總 數	舊 教	新 教
總 數	三、〇七七、四七七元	一、七三五、三七五元	一、三四二、一〇二元
不 動 產	三〇六、三八九弗	一二九、四七九弗	一七六、九一〇弗
	一五、九七五兩	九、二〇〇兩	六、七七五兩
	二、九〇九、一七七元	一、六七五、九一三元	一、二三三、二六四元
	二八四、四〇九弗	一一一、二〇四弗	一六三、二〇五弗
	一五、九七五兩	九、二〇〇兩	六、七七五兩

支那に於ける教會の社會性

第一卷 二〇九 第一號 二〇九

1) 山口登氏、「歐米人の支那に於ける文化事業」、八四四頁參照。

支那に於ける教會の社會性

第一卷 二一〇 第一號 二一〇

動産	一六八、三〇〇元	五九、四六二元
	二一、九八〇弗	八、二七五弗
		一〇八、八三八元
		一三、七〇五弗

支那全體としては、なほこの外に十七省もあるのであるから、この割を以て平均すれば、五、六千萬元を下らないであらう。なほ舊教のみに關する蒙疆全六教區（大同を含む）の一九三八年調の收支表は次の如くである。

收 入		支 出	
總數	六七五、〇〇〇元	總數	五九九、九八一
羅馬教皇廳補助金	一三七、〇〇〇	天主堂經費	一五〇、〇〇〇
外國教會寄附金	二二〇、〇〇〇	神父生活費・旅行費	八四、二〇〇
教區教友獻金	六七、〇〇〇	修道女生活費・院費	四三、五〇〇
教區財產收入	一七一、〇〇〇	教育事業費	一四〇、三〇〇
教區外財產收入	七〇、〇〇〇	救濟事業費	一三三、九九一
		建築修繕費	三九、九九〇
		租 稅	八、〇〇〇

次に、全支新教會並に關係事業の收入の概観は一九三八年の調査によると次の如くなる。

收 入 總 額		傳 道 地 以 外	
總額	一一、七四二、四二九 <sup>弗</sup>	傳道地より	四、九一六、一三一
ミッションより	六、八二六、二九八	教 會	七二八、三五一
直接補助	三、三六六、九〇五	學 校	二、〇六七、九四三
事業會計	一、四六九、二九七	醫 療	一、六四一、二一四
其 他	一、九九〇、〇九六	其 他	四七八、六二三

なほ一九三六年の新教教會並に事業について調べたところによると、六十七新教農村教會に於て、収入の六一・三％は教會外から、三八・七％は教會内部、施設事業からのものであると。ミッションの補助を受けるものは、六十七教會の中、五十四教會即ち八一％である。これら六十七農村教會の一箇所平均収入を見ると、

2) 平山政十氏、「蒙疆カトリック大觀」，參照。  
 3) Interpretative,  
 4) Madras Series V, p. 313.

總數		教會外		教會内		其他補助及基金		契約獻金		禮拜獻金		集團獻金		特別獻金		農産物獻金		土地財産より		利子		地代・家賃		其他	
528	4	324		290		17		204		93		30	6	40		10		5		2		5		3	

この様にしてミツシヨンの補助と云ふものは可成り大きな額を占めてゐる。そこで何とかして之から獨立せんものと苦慮しつつあるのであつて、例へば Price 教授の質問に對する回答によつてその大體が窺はれると思ふ。<sup>5)</sup>

年豫算を立つ	實行				計劃				議成				反對			
	實行	計劃	議成	反對	實行	計劃	議成	反對	實行	計劃	議成	反對	實行	計劃	議成	反對
日曜獻金増額	60	24	44	3	56	3	40	1	7	4	5	7	4	1	9	4
特別獻金増額	50	8	30	1	46	7	39	4	43	3	40	4	39	5	35	4
感謝獻金増額	32	19	27	2	29	12	17	1	27	1	26	1	26	1	25	1
農産物獻納	15	16	23	3	12	3	15	3	9	8	7	6	3	8	7	6
農産物提供	32	6	29	4	26	3	23	3	23	3	20	3	20	3	17	3
Lords Acre Plan	3	9	12	5	26	3	23	3	23	3	20	3	20	3	17	3
什分之二獻金	11	9	11	1	20	2	18	1	19	2	17	1	18	2	16	1
生産物謝禮(牧師)				7				4	7			5	7			
教會所有地生産				14			1	9	14			9	14			
積立金收入				15			3	9	15			9	15			
所有財産利子				12			1	11	12			11	12			
動物家畜獻納				3			8	7	3			7	3			
非基督者の財政補助				3			8	7	3			7	3			
牧師の副業				2			2	2	2			2	2			

右の中 Lords Acre Plan と云ふのは、教會が一定範圍の土地を所有して、教會員がこれを分けて耕作し、收納の幾分を教會に納めると云ふ組織である。これは支那に於て新しく試みられた特徴あるものである。教會員

支那に於ける教會の社會性

第一卷 二二一 第一號 二二一

5) op. cit. p. 324.

の献金は、その額は全く自由であるが、Price教授によると、年維持献金は年末とか收穫期とかど多く、月割献金は半數位である。日曜献金・特別献金・農産物献納等は全體の額の四分の一である。農村教會の中には此の農産物献納が五六%もあることは當然であらう。教會基金を會員やその知人に貸付けることによつて利子を得ることもあるが、時には弊害もあるであらう。併し一般社會の利子が極めて高く年二割から四割、月二分から四分であるから、教會がもし年一割かそれ以下で貸付けるならば、それは非常な救済になるわけである。教會員の状態は一般には、先述の如く、農村の中流またはそれ以下と云ふところが多いので、献金は仲々困難の様である。一人平均一年二弗から三弗(支那貨)位で、四弗以上と云ふのは少い。一九三六年の調査では、六十八教會の會員九、〇五八人中、金錢献金をするものは五、一〇三人、即ち五六・三%であり、五八二人即ち六・四%は生産物又は労働を提供したのである。この一人一年平均は一・三八圓であり、最低は一〇錢、最高は六圓三十八錢である。以てその大體が類推されるであらう。

次に教會の支出の方面については、同じくPrice教授の一九三六年六十七農村教會に関する平均によれば、<sup>6)</sup>

總 數		光 熱 費	
牧師説教者への謝禮	五〇五 <sup>円</sup>	日曜學校費	一五
其他補助者への給料	二五五	社會施設	五
門番・僕婢への賃銀	八五	擴張傳道	二七
會堂借賃	一一	中央部献金	一二
建物保存・維持・修繕	八	其の他	九
	三〇		四八

6) op. cit. p. 315.

かくて牧師への謝禮が最も大きいことになつてゐるが、Mair博士の調査によると一箇月最低一〇弗、最高二〇〇弗であると云ふ。十四傳道會の平均によると、最低平均月額二十一弗、最高平均八六弗、平均中位は四〇弗となつてゐる。Price教授の農村教會の調査によると、六十八教會の牧師謝禮は平均月額二八圓二十二錢、最低一二圓、最高一〇〇圓まで、三〇圓程度が最も多いと。かくの如き低い謝禮であるために、別に家族手當を出したり、授業料その他の免除または割引をしたり、醫療費・年金・保險などにつき共同施設をなしたりしてゐる。

以上で大體教會を中心とした財政を述べたのであるが、その他關係する多くの事業についても述べなければならぬが、それらの詳細はこゝには略する<sup>7)</sup>。併し一般に教會並に關係事業が及ぼす經濟的影響または持つところの經濟的價値と云ふものは少からざるものであるから、その點を少しく述べると、教會または關係事業が直接に農地を所有し、これを耕作し、こゝに牧畜をし、農業大學等とのよき提携によつて實際の技術的指導をも行ひつゝある。商工業についても、例へば油頭・芝罘に於けるリネン・レース工業がその初め宣教師の薦めによつたものであること、北京のハンケチ製造と燕京大學との關係、開封の果實栽培・罐詰・齒ぶらしまたは製綱の工場と同地の宣教師との關係、南京の Seventh Day Adventist school に於ける二十種の機械製品、北京の North China School of Architectural Engineering とその製品販賣のための Practical shop、先述の上海除家滙に於ける印刷・繪畫・彫刻・鑄造等、何れも有名なものばかりである。殊に信用組合即ち合作社の運動については北支に於て China International Relief Commission が關與したるところ極めて大きい。北支に於ても約一千

7) op. cit. p. 299.

8) op. cit. p. 311.

9) 外務省文化事業部、「滿洲及支那ニ於ケル歐米人ノ文化事業」參照。



の信用組合を作り、貸付利率も最低六分とし、地方教會がそれに四分を加へて一割としてゐる。それでも一般よりは遙かに低率なのである。またかゝる運動には多く基督教大學が關係してゐることも忘れてはならないのである。従つて種・肥料・施設・土地購入・共同市場・共同耕作・附屬工業まで力を盡すに至り、最近では倉庫組合が盛んに行はれつゝあると一九三三年頃の調査では報告してゐる。<sup>10)</sup>その他一般經濟事情の調査などに、基督教大學と傳道會或ひは教會・宣教師との聯携が如何によく行はれてゐるかは周知の如くである。<sup>11)</sup>

#### 四　　む　　す　　び

以上によつて大體支那に於ける教會または基督教事業が、如何にその社會の中に影響を與へまた關係を持ちつゝあるかといふことを窺つたのであるが、要するにその信者の數もさまで多くはない——全體で三百萬人位であり、全人口を四億とすればその百分の一にも足らない。そしてその多くは農民である。比較的中位の自作農である。また教會の財産にしても、一九一五年頃の標準で五、六千萬元を越えることはあるまい。また年々の收入にしても、新教一年の收入總額一一、七四二、四二九弗を、もし舊教に於ても大體同額とすれば、その總數二千四百萬弗に過ぎない(その中、ミッション補助は約半額と見られるであらう)。かゝる金額は支那全體の財政と比較するならば、例へば一九三四年の收入總額三五二、三九八、五五九弗に對しては、その七%にも及ばない。<sup>1)</sup>

この様に見たならば、支那に於ける基督教の勢力もさして大なるものと云ふことは出来ない。けれども、その歴史は約千三百年の長きに亘つてゐること、従つてその社會に及ぼす影響も量に於てよりもその質に於て見らる

10) Laymen's Foreign Missions Inquiry, China, vol II, N. Y. 1933, pp. 46.

11) The China Christian Year Book, 1936—37, Shanghai, pp. 241. etc.

1) The China Year Book, 1935, pp. 484.

べきであると思ふ。そこで、

第一に、支那社會の宗教性に與へた、また與へつゝあるものは極めて深刻なるものがあると思ふ。併しこゝではその點には觸れなかつた。

第二には、この社會構造の中にどの様な影響を與へたかと云ふに、その家族に、その郷土に、その職業に、決して大きな變化を與へたと云ふことは出來ないとしても、農村共同體に於て、植民地構成に於て、決して特色ある高度のものが實現されつゝあると云ふことは出來るであらう。

第三に、支那社會の文化に與へた影響は、蓋し大きいものがあるであらう。教育・醫療・慈善・社會施設・風教等に、また文學・科學の發展・普及のために。

そして第四に、經濟の部面に對しても近來漸くその指導性に於て重要さを増して來たと云ふことが出来る。農業に、植民に、牧畜に、商業殊に組合運動に、工業殊に手工業に、直接または間接に影響を與へた點は大きいと思ふ。指導・普及・改善・調査等々の點に於て。

かくて要するに、支那に於ける教會または基督教事業は、從來は文化の部面に殊に多く貢獻をなしたと云へるし、近來はまた經濟の部面に少からぬ關心を寄せ、影響を與へつゝあると云ふことが出來よう。(一五・一一・二)

玉井茂氏の御好意に感謝す。